重要文化的景観

長良川中流域における岐阜の文化的景観

重要な構成要素（建造物）

空穂屋

空穂屋の概要

空穂屋は、織田信長公が清州（愛知県）より商人を移転させて町立てしたとされる岐阜市鞘屋町の西側、御鮨街道に面した位置にあり、かつては紙問屋兼住宅として利用されていました。建物は主屋と土蔵からなり、主屋は表から奥に、表屋、2階建座敷、茶屋、紙倉庫と配置され、茶屋の北隣に土蔵が位置しています。

空穂屋の見どころ

主屋の構造は、木造2階建、切妻造、平入で表屋は間口一杯に接道しています。2階は比較的低く（つし2階）、正面幅約11m、表屋から倉庫まで奥行が約37mあります。土蔵の構造は、土蔵造2階建、切妻造、妻入で、家財道具蔵として利用されていました。

南側通り庭（土間）

空穂屋の特徴は、南側に設けられた通り庭（土間）が、敷居などの横木がなく、玄関から紙倉庫まで延びている点にあります。紙問屋として頻繁に行われる製品の往来を可能にしていた形態をよく残しており、街道筋にある店構えとともに、往時の鞘屋町を彷彿とさせます。また建物には、全8ヵ所に明かりとりが残っています。自然光を取り入れ和紙を透かしてその出来を判断するためのもので、生業を支えた工夫も垣間見る事ができます。

明かりとり

さらに特徴的と言えるのが，建物の増改築の歴史から岐阜の町の変化を追えるということです。例えば、当初の主屋は、通り庭の北側に部屋を1列のみ設ける「1列3室型」でした。その後、昭和6（1931）年にさらに1列増築し、「2列3室型」としました。この時、2階建座敷が建てられ、その2階には客人をもてなす本座敷が設けられました。これは、金華山と明治43（1910）年に建設された岐阜城復興天守を、この座敷から望むために設けられたものです。

上空から見た構造

建物内から見える岐阜城復興天守

空穂屋は、岐阜の江戸末・近代初期の店舗付住宅形式を良く表すものであり、岐阜町を支えた主要商業の一つである紙商の近代の経験が、建物の増築過程によく刻み込まれていると言えます。このように空穂屋は評価され、平成25（2013）年に国登録有形文化財となっています。

現在は、雑貨店兼住宅として利用されています。地元の小学生の見学が毎年数多く行われ、所有者の方が、見て、触ることができるものとして、子どもたちに空穂屋の建物の良さだけでなく、古いものを継承していくことの大切さなどを伝えています。

アクセス

〒500-8041 岐阜市鞘屋町38 ☎058-215-7077
岐阜バス「本町1丁目」バス停下車
南に徒歩約5分

長良川と町を巡る

1 長良川の鵜飼

現在は6名の鵜匠が行っています。

2 鵜匠家

鵜匠が鵜と共に暮らし、そのために必要な施設があります。

3 川原町（川原町屋）

川の中にある集落で、白木の格子が続いています。

4 岐阜公園三重塔

旧長良橋の古材を利用しています。

所用時間　約2時間 / 約4km

「長良川中流域における岐阜の文化的景観」全覧図〔昼〕
奈良文化財研究所景観研究室作成

重要文化的景観

長良川中流域における岐阜の文化的景観

長良川と金華山という豊かな自然に囲まれた町で人々は、長良川を物流の主軸や鵜飼の舞台として、また金華山を政治の拠点、憩いの場として利用してきました。この長良川と金華山、町と人々が一体となって形成してきたこの文化的景観は「岐阜市の原風景」ということができます。

金華山と町を巡る

① 伊奈波神社界隈

岐阜市の総産土神である伊奈波神社などの寺院が多く集まっています。

② 御鮨街道（空棟屋）

鵜飼で捕れた鮎を塩漬けにし、この道を通り江戸まで運んだことに由来します。

③ 正法寺大仏殿（岐阜大仏）

黄檗宗の寺院で、籠大仏と呼ばれる本尊があります。

④ 岐阜城復興天守

現在は、昭和31年（1956）年に造られた2代目の復興天守です。

所用時間　約2時間 / 約3km
（ロープウェイ使用）

岐阜市の重要文化的景観の概要

選定日

平成26年3月18日

選定地域

長良川地区、金華山地区、鵜飼屋地区、川原町地区、旧城下町地区（331.9ha）

長良川と人々

古くから人々は、長良川とともに生活し生業を営んできました。川には多くの川湊が開かれ、材木、和紙などが運ばれました。また今でも伝統的な川漁が行われ、特に1300年の歴史を誇る鵜飼は代表的です。現代の人々は、川遊びなど、憩いの場として長良川を利用しており、岐阜の人々は、いつの時代も長良川と共に暮らしてきたといえます。

金華山と人々

金華山は、戦国時代には斎藤道三公や織田信長公の居城として機能していました。近世になると絵画などで、鵜飼の背景として金華山が描かれる構図が見られるようになります。現在は、毎日多くの人々が山に登り、山頂からの眺望を楽しみ、町の人々は、生活の中で金華山を見上げ、常に山を意識して暮らしています。

人々のくらし

旧城下町は商業により発展し、材木や紙の問屋業や手工業が発生しました。金華山に岐阜城復興天守が造られると、大事な客人をそこでもてなし自らも楽しむために、城が見える位置に本座敷や茶室を置くようになります。また地域の人々は、通りに面した家屋の木部を年に数回水や湯で洗います。この習慣により、白木の格子の町並みという独特の景観は維持されています。

発行：岐阜市教育委員会社会教育課　〒500-8720 岐阜市神田町 1-11　TEL.058-214-2365